

トラッジ と ジッピー

ジッピーは、少し いらいらしてきました。今日は、森に カーニバルが
来ているのです。先週から ずっと、その カーニバルに 行くのを
楽しみに していました。それなのに、お父さんも お母さんも、弟たちも
妹たちも、出かける 支度が とっても おそいのです。やっとの ことで
みんな 道に 出て、今度は ジッピーの 友だち トラッジを 待っています。
ですが、一体 トラッジは どこに いるのでしょうか？

「トラッジ！ トラッジ！ どこに いるんだい？ 朝早くから 行って
全部の 乗り物に 乗れるように、もう 準備が できてるはずだよ。早く
行こうよー！」



すると、スイレンの ^は葉が
ガサガサと ^{うご}動き、^{みず}水の
^{なか}中から ^{トラッ}トラッが
ひょっこりと ^{かお}顔を
^だ出しました。

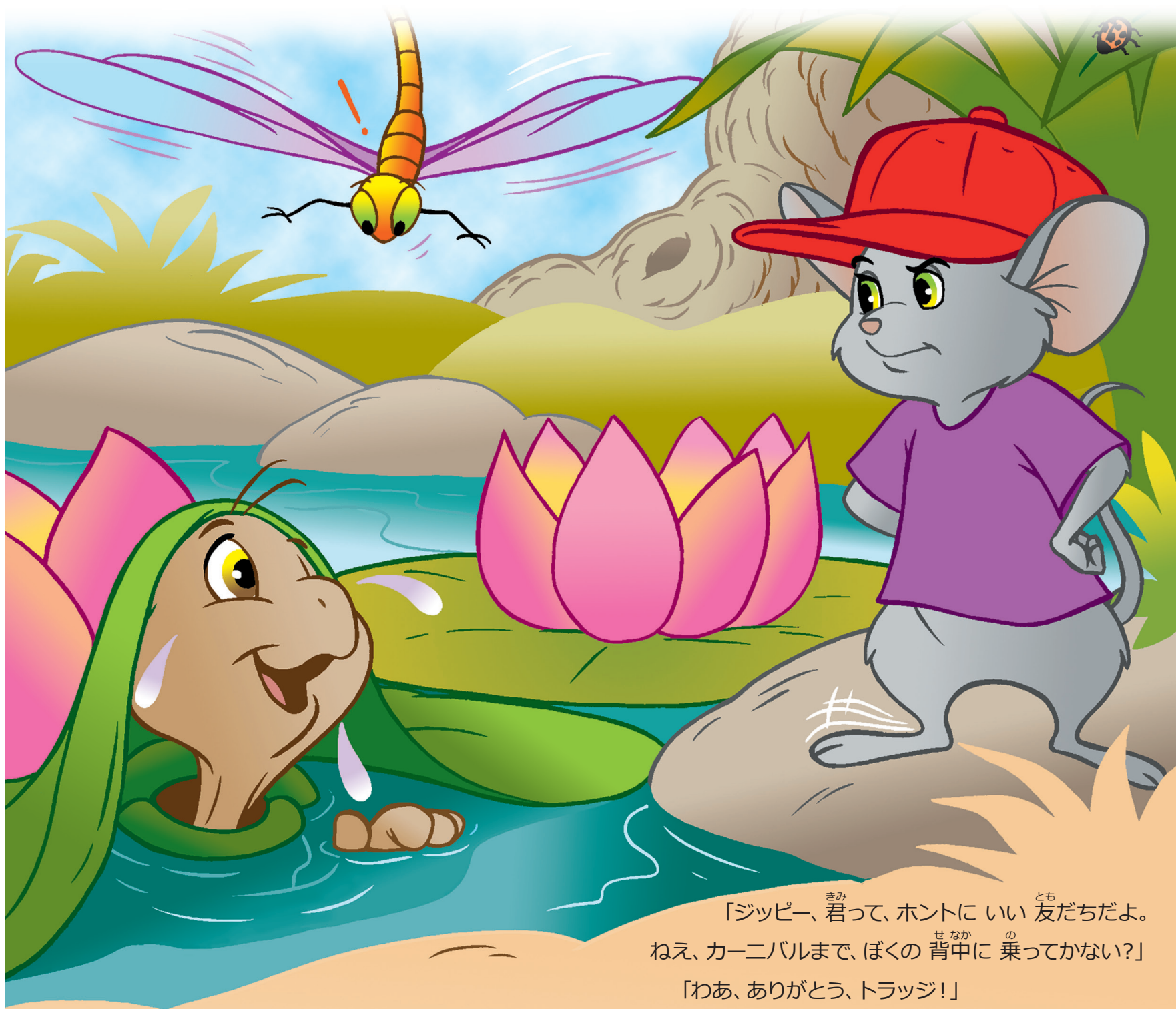
「やあ、ジッピー！ ^{ばんじ}万事
^{じゅんちょう}順調、ぼくは ^{ここ}ここだよ！」

「エヘン。」

「しまった。ごめんよ、
ジッピー。朝の ^{あさ}一泳ぎを
してたら、すごく ^{きもち}気持ち
よくて、つい ^{じかん}時間の ^{こと}ことを
^{わす}忘れちゃったよ。」

「ううん、いいんだよ。
だれでも ^{うっかり}する
ことは ^{ある}からね。
それよりも、^{はや}早く ^い行こう！

みんな、^ま待ってるよ。
お父さんと ^{かあ}お母さんが、
^で出かける ^{まえ}前に ^{みんな}に
^{はな}話したい ^{こと}ことが
あるんだって。」



「ジッピー、^{きみ}君って、^{とも}ホントにいい友だちだよ。
ねえ、カーニバルまで、ぼくの ^{せなか}背中に ^の乗ってかない？」

「わあ、ありがとう、トラッジ！」

「^{やす}お安い ^{よう}ご用さ。」

カメのトラッジには^{かた}固い^{こうら}こうらがあるので、
ジッピーを^の乗せて^{ある}歩けるのです。トラッジの
こうらは、^き黄色と^{みどりいろ}緑色の^{とち}まだらでした。友だちの
ジッピーは^の野ネズミで、^{はいいろ}灰色です。毛は^け短く、
ちっちゃな^{みみ}かわいい耳がついています。しっぽは
^{ほそなが}細長くて、^{はりかね}針金のような^はでした。ジッピーは、
トラッジの^{いけ}池の^すそばに^に住んでいて、二ひきは
^{まいにち}毎日^{あそ}いっしょに^{あそ}遊んでいました。

「さあ、行こう。^{したく}支度が^いできたって、^しみんなに^し知らせてくるね。」ジッピーが^{ビュン}と
^{みち}道に^む向かって^あかけ^い上がって^あ行くと、トラッジは^{あと}その後を^{のぼ}のっその^いつそと^い登って^い行きました。
みんな、わくわくです。行く^い時は^{とき}みんなで^いいっしょに^い行き、カーニバルに^つ着いたら、
トラッジとジッピーは^{あいだ}しばらくの間、^に二ひきだけで^{こうどう}行動して^いいい^{こと}こと^になっていました。





やっとトラツジが^{みち}道に^つたどり着くと、
父^{とう}さんネズミが^{はな}話し^{はじ}始めました。

「子どもたち、よくお聞き。今日は、
森^{もり}もカーニバル^{かいじょう}会場^{どうぶつ}も、動物^{きょう}たちで
いっぱいだ。乗り物^のや見世物^{もの}は
そこ^{じゅう}ら中でやっているから、混雑^{こんざつ}の
中^{なか}ですぐに^{はぐ}れてしまうかも

しれない。だから、もしはぐれたら、
とにかく4^じ時に^{いわ}岩^{ひろば}の広場^{ひろば}でほかの
みんなと^あ会うことにしよう。

ひとり^{ひとり}ひとりのために、森^{もり}とカーニバル^{かいじょう}
会場^{ちず}の地図^{ちず}を^かいておいたからね。

それと、おまえ^{なまえ}たちの名前^{しゅうしょ}と住所^{しゅうしょ}を
書いた紙^かも母^{かみ}さんが用意^{かあ}してくれた
から、万^{まん}が一^{いち}、まい子^こになって
だれかに^{たす}助け^{ねが}を^{とき}お願いする時には
つか^{つか}使いなさい。」

父^{とう}さんネズミはいつも、まい子^こに
なったら^{どう}するか、子ども^こたちが
わ^わ分かっているか^{かくにん}どうかを^{かくにん}確認^{かくにん}します。

「ああ、最後^{さいご}に^{ひと}もう一つ^{どうぶつ}。動物^{どうぶつ}たちは
みんな、カーニバル^{あいだ}の間^{あいだ}はマナーを
きちんと^{まも}守^{まも}り、ほか^{どうぶつ}の動物^{どうぶつ}に
めいわくを^{やくそく}かけないと約束^{やくそく}している。」

「だがな、^き気をつけるんだぞ。
じいちゃんネズミが いつも
^い言っているだろう？ 『カーニバル
だろうと ^{なん}何だろうと、しよせん、
ネコは ネコ』だって ことをな。」

「うわ〜！」

「あなた、^こ子どもたちが こわがるわ。
ネコの ^{はなし}話は、もう ^{じゅうぶん}十分よ。」

「それも そうだな、^{かあ}母さん。では
みんな、^い行くと ^{たの}しよう。楽しんで
おいで！」

「わーい！」

「トラッジと ジッピーは、いつも
いっしょに ^きいて、^き気をつけるんだぞ。
わしらは ^{さき}先に ^{ある}歩いて ^い行くが、あまり
おくれんようにな。では、4 ^じ時には
^{いわ}岩の ^{ひろば}広場で ^あ会おう。」

「さあ、^の乗った、ジッピー！ ^{しゅっぱつ}出発だ！」

ジッピーが こうらに すわると、
トラッジは ^{ある}のっそりと ^{はじ}歩き始め
ました。自分では ^{じぶん}走っている つもり
なのですが、トラッジには ^{ぜんそくりよく}全速力でも、
ネズミの ジッピーには ^{うんてん}のろのろ
運転です。



「ねえ、トラッジ。もうちょっと
はやく^{ある}歩けない？ カーニバルが
待ち^ま切れ^きないよ。」

「確かに、ぼくは^{きみ}君と^{くら}比べたら
おそいよ、ジッピー。だけど、^{すく}少なくとも
ぼくは^{あんぜんうんてん}安全運転さ！ そのうち
着^つくから、^{しんぱい}心配ないよ。」

「そのうちだって？ トラッジって、
のんきだなあ。ぼくの^{かぞく}家族は、もう
^み見えないよ。」

ジッピーは、トラッジが^{だいす}大好きです。
ただ、^{とも}友だちが^{かめ}カメだと、それは
それは、^{つよ}しんぼう強くないと
いけません。ジッピーは^むあお向けに
なって、^{しろ}白い^{くも}ふわふわした雲が
ゆっくりと^{うご}動いていくのを^{ながめて}ながめて
いました。やがてジッピーは
うとうと^{はじ}し始め、ねむってしまいました。
^{おお}大きくて^{おいしい}おいしいそうな^{チーズケーキ}チーズケーキの
^{ゆめ}夢を^み見ながら……。



「わーい！」

かんせい 歓声や おんがく 音楽なんかの おと 音で、ジッピーは め 目が
さ 覚めました。カーニバルに つ 着いたのです。

「着いたよ、ジッピー！」

「うわあ、わくわくするなあ！」

の もの 乗り物に 全部 ぜんぶ 乗って、
おいしいものを 全部 ぜんぶ 食べて
まわ 回るのが ま 待ち切れないよ！」

「ポップコーン、ポップコーン！
ポップコーンは いかがかね？」

「ひゃー、ここって、すごく
でっかいねえ！ ぜんぶ 全部 まわ 回るのに、
なんにち 何日も か かかるよ！」

「それなら、早く はや 行かなきゃ！
トラッジ、こっちこっち！」

「待ってよ、ジッピー！
はや 速すぎて、ついていけないよ。」

「わ 分かった、わ 分かった。ねえ、
あそこにおっきな かんらんしゃ 観覧車がある！
あれに の 乗らない？」

「うん、おもしろ 面白そうだね。」
そこで に 二ひきは、たの 楽しそうな
おんがく 音楽が き 聞こえてくる、おお 大きな
かんらんしゃ 観覧車の ほう 方 い に行きました。



に二ひきが乗ると、観覧車は どんどん、どんどん、
上^{うへ}に 上^あがって行^いきました。森^{もり}の 木^き々^ぎより^もも 高^{たか}く
上^あがって行^いきました。はるか 遠^{とお}く^けの 景^け色^{しき}まで よく
見^みえます。下^{した}を 見^みると、みな、豆^{まめ}つ^ぶの^{よう}に
小^{ちい}さく 見^みえます。

「わあ! 下^{した}を 見^みて、ジッピー! 空^{そら}を 飛^とんで
い^とる 鳥^{とり}たちには きっと、ぼくたちが あんなふう^みに
見^みえるんだね。」

「そうだね! 見^みて、あ^{ひろ}ち^ばの 広^ま場^{なか}。真^まん^{なか}中^に
大^{おお}きな 岩^{いわ}が あるよ。4時^じに み^あんなと 会^いう 岩^{いわ}の
広^{ひろ}場^ばだね。」

その日^ひ、仲^{なか}良^よし二ひきは、遊^{あそ}んで 遊^{あそ}んで 遊^{あそ}び
ま^のく^りました。メリーゴーランドにも 乗^のりました。

「ホントに 楽^{たの}しいね。」

バンパーボートにも 乗^のったし、大^{おお}きな
ティーカップにも 乗^のって、ぐるぐる 回^{まわ}ったし・・・。
手^て品^{じな}師^しトムキャットの マジックショ^みーだ^って 見^みました。

「ジッピー、ネコについて お父^{とう}さんが 言^いったこと、
覚^{おぼ}えてる? 十^{じゅう}分^{ぶん} はなれてないとね。」

「そうだね、トラッジ。後^{うし}ろ^{ほう}の 方^みで 見^みようね。」

「見^みて、ジッピー。あ^みちに カワウソが いる。
ピエロの か^みっ^こう^うを して^いるよ。」

「カワウソだ^って? す^すご^ごい お^おか^かしいね!」

「みなさん、乗^のってくださいーい。」
「最高^{さいこう}に 怖い 乗り物^{もの}、こうらから
飛び出^としそ^だうなく^{げんてい}らい 怖いよ! カメ限定。」

「ポップコーン、ポップコーン! ポップコーンは
いかがかね?」

「しぼりたての ジュースだよ。」

「キャラメルは いかがかね? キャラメル、
キャラメルだよ。」

「うわあ、おなか へったなあ。あそこの
スタンドへ 行^いって、何^{なに}か 買^かおうよ。」

「うん、行^いこう、行^いこう! ぼくも おなか ペコペコ。」

「さあ、ぼうやたちは 何^{なに}が 食^たべたいかね?」

「え〜っと、ぼくは、あの おいしそうな チーズ
ケーキが いいな。それと、ポップコーンを ください。」

「トラッジは 何^{なに}に する?」

「う〜んとね。そうだ、虫^{むし}バーガースペシャルに
するよ。」

「すぐに できますよ。ほかには?」

「えっと、海草^{かいそう}フライを 付^つけてください。」

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます!」

「う〜ん、この チーズケーキ、おいし〜!」

「この 虫^{むし}バーガー、食^たべてみる? すごく
おいしいよ。」



に
二ひきは、それは それは たの とき
す
過ごしました。そして、あっというまに
に ち す ひ
1日 が 過ぎてしまいました。日は
かたむき、もう 岩の 広場に 向かう
じ かん
時間です。ちょうど その時、もう一つ、
まだ 見ていない アトラクションが
あるのに きが つきました。

ぐちゃぐちゃ めい ろ 迷路

「ねえ、トラッジ。もり 森の そばに 看板が あるよ。
『ぐちゃぐちゃ迷路』だって。まだ 入ってないよ。」
「あ〜、でも、何か ちょっと 暗くて
き み わる
気味悪そうだなあ。それに、もう 広場に 行かないと。
ぼくは、きみ よりも ある 歩くのが おそいしね。」
「ぼくの 勘だと、ひろ ば
森の ちょうど 向こう側だと 思うんだけど。
めい ろ とお ちかみち
ぐちゃぐちゃ迷路を 通れば、近道が できるよ。」

「そうかなあ。もし ^{ちかみち}近道^ごがなくて、まい子^{きみ}になっちゃったら どうするの？ 君^{とう}のお父^{ちず}さんがくれた 地図^みを 見てみようよ。」

「分^わかったよ。え〜っと。確^{たし}か、この辺^{へん}に 入^いれてたはず^のなんだけど。あれ、ないなあ！ きっと、乗^{もの}り物^のに乗^のってた 時^{とき}に 落^おとしちゃったんだよ。まあ、いいや。地図^{ちず}なんて、なくても だいじょうぶさ。ぼくはネズミだからね。暗^{くら}くても、道^{みち}は 分^わかるんだ。トラッジ、ちょっとは 冒^{ぼうけん}険^{けん}してみようよ！」

「冒^{ぼうけん}険^{けん}かあ。ぼくも、乗^のり物^{もの}に 乗^のってた 時^{とき}に 地図^{ちず}を 落^おとしてきちゃったみたいだよ。」

ジッピーは、何^{なん}とか トラッジを なだめすかし、とうとう トラッジも、ぐちゃぐちゃ迷^{めいろ}路^{はい}に 入^いることにしました。

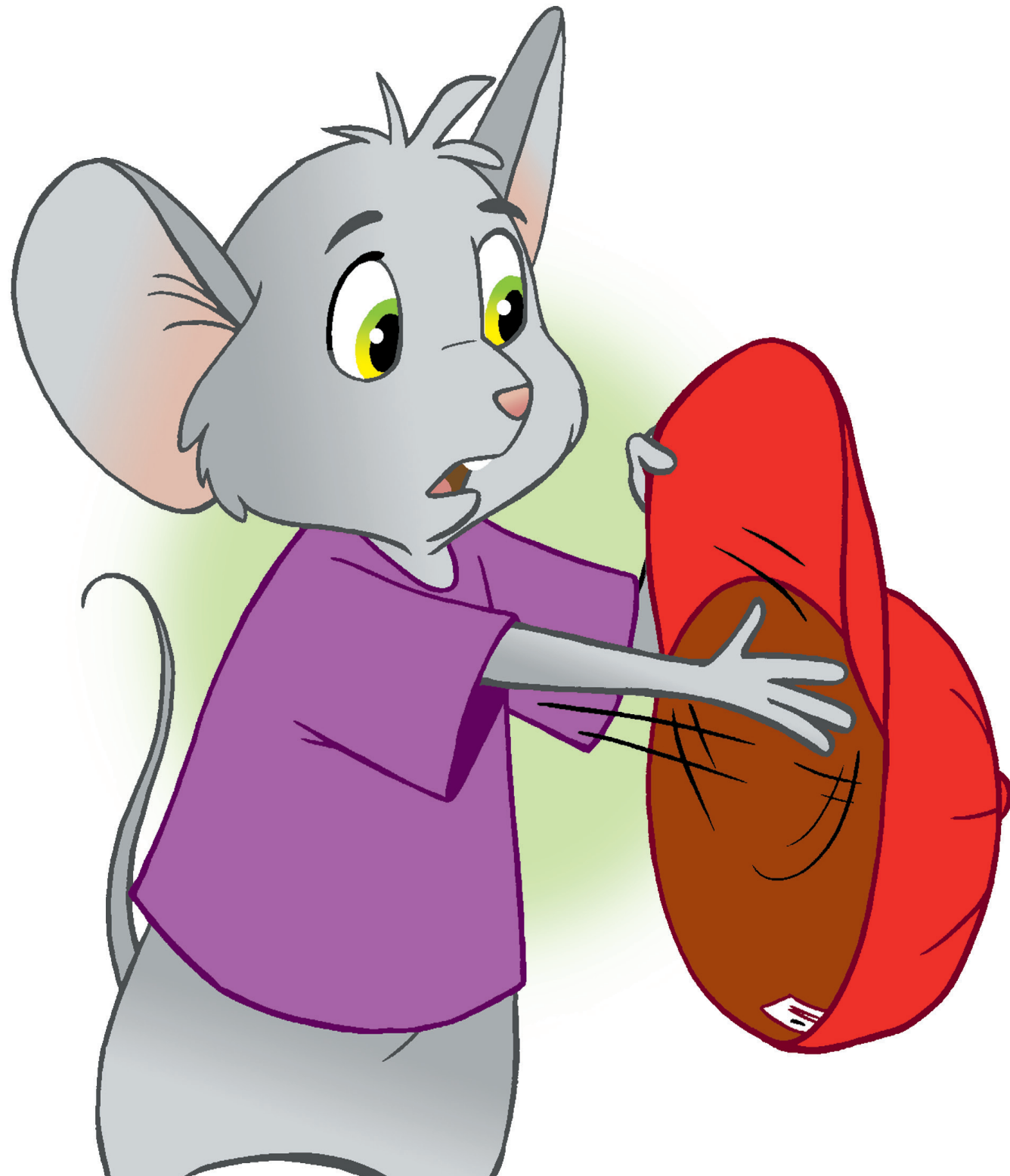
「う〜ん、分^わかったよ。君^{きみ}が そこまで 言う^いうならね。」
うっそうとした しげみ^{なか}の 中^{はい}に 入^いって行くと、ジッピーが 思^{おも}っていたよりも、道^{みち}は ずっ^いと ごちゃごちゃしていました。

「ねえ、ジッピー。ぼくたち、今^{いま} どこに いる^いんだろう？
どっちに 行^いったら いい^いんだろう？」

「え〜っと、たぶん こっちだよ。」

「ああ。」

「いや、そっちかも しれない。それとも、こっちかな。
いや、あっちだ！」





に二ひきは、後ろを ふり返りました。
どの道を行けば、森の 入口まで
もどれるのでしょうか？ 木や
しげみが うっそうと していて、
そら 空も ほとんど 見えません。少し
さき ほう 先の方だって、 見えないのです。

「どうしよう！ どうしたら
ここから 出られるだろう、ジッピー？」

「ああ、わかってる、わかってる。
こっちに 行こう。早く 早く。後ろかな、
ひだり 左かな、いや、みぎ 右かも。いや、まっす 真っ直ぐ
行ってみよう。早く、こっちだよ・・・」

ジッピーは、こっちに ちょこまか、
あっちに ちょこまか、そっちに
ちょこまか、こっちを のぞき、あっちを
のぞきて、見覚えのある 道は
ないかと、せわしなく かけ回ります。
かわいそうな トラッジ。道を 曲がって
坂を 上ったと 思ったら また 降りて、
ある 歩いて 歩いて 歩きづめで、もう
へとへとです。それでも、道は まだ
わかりません。

「ねえ、ジッピー。ぼくたち、
まい子に なっちゃったんだよ！
やっぱり、来なけりゃ よかったんだ。」

「最初は ちょっと 面白かったけど、だんだん こわくなって
きちゃった。もう おそいし、うちに 帰りたいよ。」

「ぼくもだよ、トラッジ。」

「どうしよう?」

「わ、分からないよ、トラッジ。君の 話に 耳を かさなくて、
ごめんね。君の 言う通りだったよ。こんなに おそいのに、
ぐちゃぐちゃ迷路になんか、入るべきじゃ なかったんだ。
だれも いないから、きける 人も いないしね。」

「そうだ、ジッピー。助けてくれる 人が いるよ。」

「だ、だれだい?」

「あのね、母さんが いつも 言ってたんだ。何か こまった
ことが あれば、イエス様に 話しなさいって。」

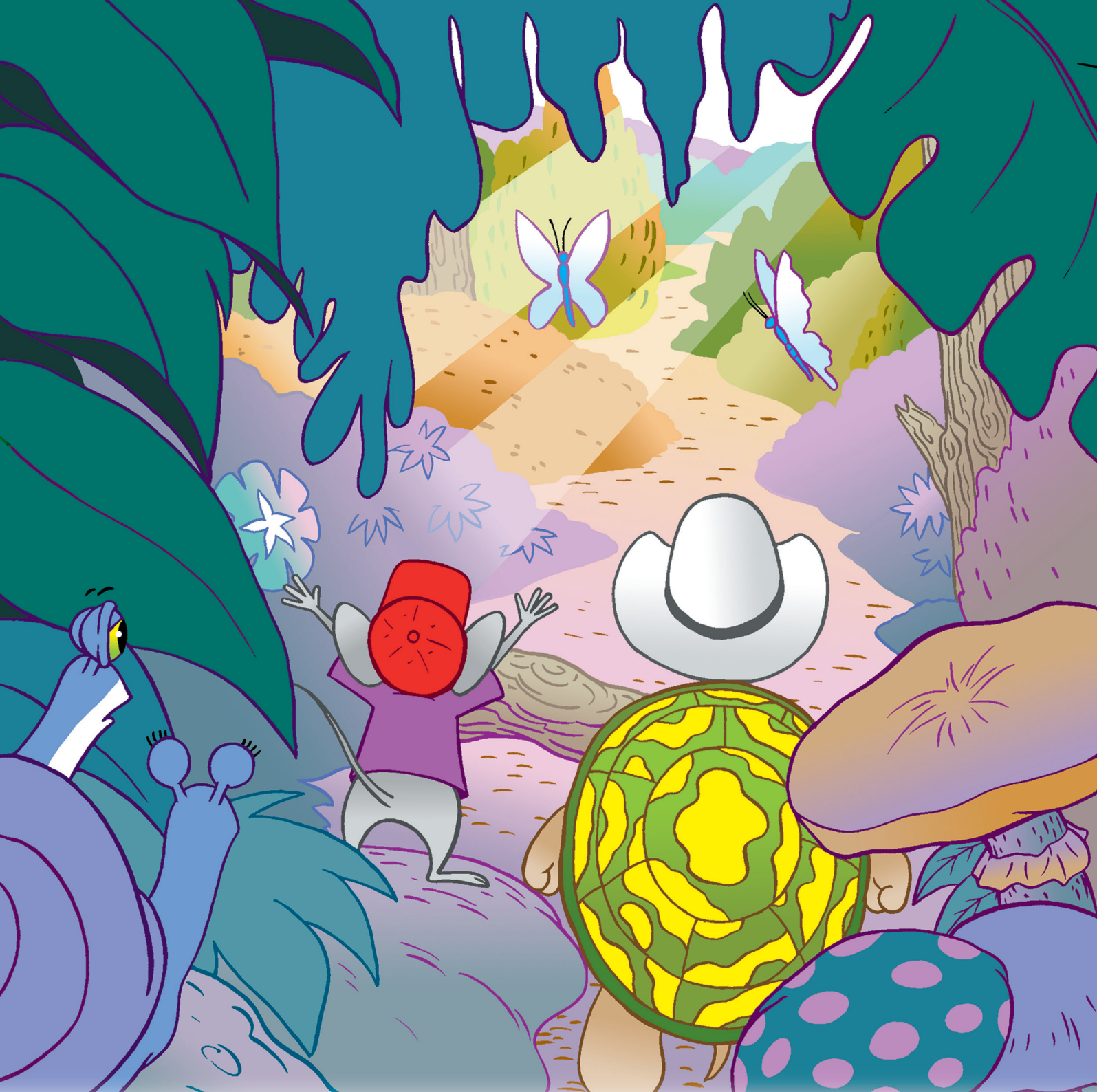
「それは いい 考えだね。イエス様なら、ここから 出る
道だって、知ってるしね。祈って、助けてもらおうよ。」

「うん、祈ろう。」

「イエス様、ぼくたち、まい子に なってしまいました。
どうか、助けてください。みんなと 会う 場所への 道が
見つかりますように。」

二人は しばらくの間、静かに して 頭を たれていました。





きゅう 急に、ジッピーが かお あ 顔を 上げました。

とても うれしそうです。

「あれ、^き聞こえる？」

「何だい、^{なん}ジッピー？」

「音楽だよ。あっちの 方から、
^{かんらんしゃ}観覧車から ^き聞こえてた ^{おんがく}音楽が
^き聞こえてくる。^{かんらんしゃ}観覧車は、^{いわ}岩の
^{ひろば}広場の ^{ちか}近くだったよね！」

「そう 言えば、そうだね。」

「だから、^{おんがく}音楽の ^き聞こえる ^{ほう}方へ
^い行けば、^{かんらんしゃ}観覧車が ^み見えてきて、
^{ひろば}広場も ^みすぐに ^み見つかるよ。」

「^{めいあん}名案だね。じゃ ^い行こう、
ジッピー！」

^{ふたり}二人は ^{ところどころ}所々で ^た立ち止まっては
^{みみ}耳を ^{ただ}すまし、^{ほう}正しい ^む方へ ^む向かう
^{みち}道を ^{たど}たどっていきました・・・。

「こっちだ！」

・・・そして とうとう、^に二ひきは、
よく ^{ふつう}ふみならされた ^{みち}普通の ^{みち}道に
^で出ることが ^{できた}のでした。

「木の ^き上を ^{うえ}見て！ ^み観覧車の
てっぺんが ^み見えるよ！」

「ホントだ！」

ジッピーとトラッジは、ほっとしました。

「行こう!」

ジッピーはうれしくて、思わず観覧車の方に走り出しました。トラッジでさえ、カメとは思えないほどの速さで走ったのです。そしてとうとう、二ひきは観覧車の下に着きました。

「見て、トラッジ。広場に向かう道だよ。あそこ! イエス様が、道を見つけるのを助けてくださったんだね。」

まもなく、二ひきは野ネズミ一家と無事、落ち合うことができました。

「あなたたちのことが心配になりかけていたのよ! ねえ、お父さん?」

「全くだ。ちょうど、キツツキパトロールに助けをお願いしようとしていたところだよ。」

「無事にここまで来れて、本当によかったわ。神様ののおかげね。」

「さあてと、みんな、家に帰る支度はいいかい?」

「はい!」





その夜、仲良しの二ひきが空を見上げると、星がキラキラ
かがやいていました。二ひきは今日の冒険を思い出していました。

「万事うまくいって、本当によかったよ、ジッピー。」

「ホントにね！ 一晩中ぐちゃぐちゃ迷路を歩き回らずに
済んで、すごくうれしいよ。」

「ねえ、トラッジ。ぼくたちって、いい仲間だよ。君は
ゆっくりだから、時々じれっなくなっちゃうけど、友だちで
うれしいよ。ぼくの友だちでいてくれて、ありがとう！」

「ぼくも、ちょうどおんなじことを考えてたんだ、ジッピー。
時々君に追い付けなくても、ぼくは気にならないよ。
何てったって、君はぼくの最高の友だちだもの。いっしょにいて、
いつもすごく楽しいよ。」

「それに、ぼくたちには、イエス様っていう、最高の友だちも
いるしね！」

「ホント、ホント、全くだよ、ジッピー。」

そして二ひきは、キラキラとかがやく星空の下で、
すやすやと眠りについたのです。

文：ディレック&ミッシェル・ブルックス

絵：ヒューゴ・ウェストファルとアナ・フィールズ

Copyright © 2000年、オーロラ・プロダクションズAG、使用許諾取得済

“Trudge & Zippy”--Japanese

<http://www.mywonderstudio.com/level-1/2012/9/5/slidecast-trudge-and-zippy.html>